



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『狭衣物語』女二宮物語論：「あはれ」「つらし」を軸として
Author(s)	萩野, 敦子
Citation	国語国文研究, 102, 1-15
Issue Date	1996-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94842
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_102_01-15.pdf



『狭衣物語』 女二宮物語論

——「あはれ」「つらし」を軸として——

萩 野 敦 子

(一)

『狭衣物語』の中で重要な位置を占める女君のひとり、女二宮をめぐる先行研究は従来必ずしも活発であつたとはいえず、その役割の解析も多くは今後の課題として残されているように思われる。そうした意味で、一九九〇年代に入ってから発表された鈴木泰恵氏・久下裕利氏の研究論文は、『狭衣物語』における女二宮の役割に積極的な評価を与えようとした論考として、研究史的に意義が小さくない。両論文は方法的に全く異なつたものであるが、ともに源氏宮の身代わりのに出発した女二宮が如何に彼女固有の役割を獲得していくかを、言い換えれば、源氏宮の下位という物語始発時の位置付けからの女二宮の浮上を論じているところに、共通性があつた。『狭衣物語』が最終場面のヒロインとして女二宮を選んでゐる事実ひとつとつても、女二宮を論ずることは、『狭衣物語』そのものを論ずるために避

けては通れないはずなのである。

鈴木氏が「相対的に比重を増す」とし、久下氏が「源氏宮と対等ないしそれ以上に浮上する」とした、女二宮の——特に源氏宮との相対的な関係においての——物語内における位置付けの変化がはっきりと表れはじめるのは、言うまでもなく巻三の狭衣と一品宮との結婚をめぐる一連の出来事においてである。なかでも端的かつ重要な箇所として、次の狭衣の内省場面をあげておきたい。

Aさしも飽かぬところなく、らうたげにうつくしかりし御有様をだに、「なほ室の八島には、え立ち並びたまはざらん」と、せちにおとしめ思ひやりきこえたまひしも、御目ならひにはことわりぞかし。まづうち思ひ出でられたまふをも、いとど恋しうて、「垣ほに生ふる」とぞ言はれたまひぬべき。「いと、さばかりの宿世こそかたからめ、など、この嵯峨野の花はよそのものになして。げに、何事かはなのめにいでやとおぼゆることのありし」

と思ひ出でたまふも、さはいへど、けちかきほどのあはれはこ
よなし。³

(巻三・八〇ウ〜八一オ)

傍線部直前の一文は、流布本と非流布本とで微妙に違いがあり、ゆえに「ことわり」とされる内容の解釈が異なってくるころなのであるが、ここは非流布本系本文をそのまま採用することにして、「女二宮の完璧な御様子にもかかわらず、源氏宮を見慣れた目には、彼女が劣つてみえたのもつともである」というふう⁴に解しておく問題にしたいのは傍線部で、ここは本文上の異同がほとんどないにもかかわらず、先行研究の解釈に揺れがある。

現代の代表的注釈書である大系本・全書本・集成本の訳注を見てみると、全書本と集成本との解釈は一致している。代表させて刊行年の新しい集成本の訳をあげる。

何につけても、まず思ひだされるのは源氏の宮の御事であつて、源氏の宮を思えばたちまちに胸の痛む辛いお気持ちになり、「恋しい」と思わず口をついて出てしまひそうである。

(下巻・九八頁)

この訳に拠れば「垣ほに生ふる」を源氏宮に対する思いを象徴する引歌表現とみることになるわけだが、その当否はいかがであらうか。言うまでもなくこの句は、

あなこひし今も見てしが山がつかきほにおふる(古今一さけ

る)山となでしこ

(古今六帖・三六三〇、古今集・恋四・六九五・読人不知。引用は新編国歌大観に拠る)

を典拠とするものであるが、問題はこの歌句が源氏宮に対する思いを象徴するものとしてふさわしいかどうかである。

一方大系本は、傍線部に傍注として「源と女二を」と付し、「垣ほに生ふる」を二人の女君に対する思いを象徴する歌句とする。さらに、この大系本の傍注を受けつつ、伊藤博氏⁵が次のような解釈を提示している。

「垣生に生ふる」は源氏宮と女二宮への恋情を言うのかも知れないが、この歌句は巻二にすでに見え、そこでは女二宮への思いを述べるのに使用されている。それ故、「垣生に生ふる」は女二宮についてのみ言う歌句とみてよからうか。

私としては、この伊藤説を妥当とみたい。伊藤氏が指摘するように、「垣ほに生ふる」は巻二において既に、女二宮に関連して引用されていた。

B 心苦しげなりつる御けはひの、なべてならず身に添ひたる心地すれば、「垣ほに生ふる」とも言はれぬべきを、なほつつましきのわりなく、

(巻二・二〇ウ)

流布本系本文に従うと「あなこひし」歌の引歌表現はほかに二箇所⁽⁷⁾にみられることになるが、非流布本系本文では「あなこひし」歌を引くのは引用A・Bの二箇所のみであり、このことから考えるに、引用Aの引歌表現も女二宮に対する思いを示したものとみてよいのではないか。

その傍証となるのが、一品宮との縁談が進むなか傷心の狭衣が女二宮に歌を贈った、次の箇所である。

C 前裁ども、雨に心地よげに思ひたる中に、大和撫子のいたう濡れてかたぶきたるを折らせたまひて、嵯峨の院へ参らせたまふ。

恋ひわびて涙に濡るるふるさとの草葉にまじる大和撫子とあるを御覽せさすれど、例のあらんやは。

(巻二・六五〇ウ)

この「大和撫子」は直接には二人の間に生まれた秘密の子(若宮)になぞえられたものであるが、少なくともこの場面から、「大和撫子」が女二宮・若宮母子への連想を導くものとして狭衣に意識されていることは、認められるはずである。言うまでもなく「なでしこ」自体、時には「かわいい子」を、また時には「いとしい恋人」を喻えうる和歌の素材であり、その二義性が女二宮・若宮母子の物語においていかされているということであろう。そして母子の「なでしこ」の物語は、狭衣が問題の夜に女二宮を「撫で」、(撫子の異名「常夏」⁽⁸⁾とこなつ)から導かれるところの「床」を共にしたときから始まっていたのであった。『狭衣物語』における「ことば」に対する

意識の先鋭さを思えば、「大和撫子」にかかわる文脈は基本的に女二宮につながっているものとみてしかるべきであろう。引用Aの傍線部のあとに「この嵯峨野の花」とあるが、「垣ほに生ふる(大和撫子)」を指しての指示語「この」の使用であると考えておきたい。

引用A場面の厄介さは、狭衣の内省部分と語り手の批評部分とが明確に区別しにくいところにある。傍線部前の一文は「ことわりぞかし」と結ばれ、かたちとしてはいわゆる草子地なのだが、語り手が狭衣に寄り添うこと著しいこの物語のありかたから考えるに、狭衣自身の心を反映した一文とみて差し支えあるまい。とすれば一品宮との不如意な結婚を強いられた直後のこの内省場面では、「室の八島」源氏宮と「嵯峨野の花」女二宮という二人の女君に対する狭衣の思いが、まさに縦横の糸として織り成されて提示されているわけである。

しかし縦横の糸であるとはいっても、「垣ほに生ふる」が女二宮を指向し「まづうち思ひ出でられ」たのが女二宮であったと読むならば、この場面は、中心をあくまでも女二宮思慕とする、すなわち源氏宮を引き合いに出しつつ強い後悔の念をもつて狭衣が女二宮を想う場面である、ということになろう。だからこそこの場面の最終結論は「けちかきほどのあはれはこよなし」なのである。つまり、源氏宮との間では持ちえなかった「けちかきほどのあはれ」を女二宮との間ではかつて持ったことがある、という事実によって、狭衣にとって女二宮は一面において源氏宮を凌駕する存在たりえている、と言えるのではあるまいか。

しかしここで問題となるのは、『狭衣物語』においては結局のところ

ろ、狭衣と女二宮とが「けちかきほどのあはれ」で結ばれたがゆえの親近性を示すことはない、ということなのである。「けちかきほどのあはれ」を二人の間に認めたい狭衣が、その同意を女二宮に求め続ける一方で、女二宮のほうではそれを決して認めようとはしない。「けちかきほどのあはれ」を肯定しようとする男の心と否定しようとする女の心との、心の乖離。その乖離にこそ、「女二宮物語」の本質が発揮されていると思われるのである。

そこで以下の節では、心理的親近性を示す形容語である「あはれ」の「女二宮物語」における否定的な表れかたを細かく見ていくことにより、さらには心理的非親近性を示す点で「あはれ」と対極的な位置にあると思われる「つらし」という形容語にも注目することにより、狭衣と女二宮との乖離のありようを追っていきたい。そうすることでおのずと『狭衣物語』における女二宮ならではの役割も明らかにするはずである。

(11)

前節で「けちかきほどのあはれ」の有無が、狭衣の内面における女二宮と源氏宮との位置付けの違いのポイントとなつていることを指摘したのであるが、因みに『狭衣物語』に使用される「あはれ」の語を調査してみると、おおまかな数字であるが約二百あまりの用例のうちほぼ半数が、飛鳥井女君関係および女二宮関係の記述において現れていることが明らかになる。物語内には狭衣の恋物語とは無関係の「あはれ」も多数あるが、それらを差し引くと、この二人

の女君にかかわる「あはれ」の多さは目立っている。この二人と並ぶ、あるいは二人以上に「女主人公」的資格を備えているとみられる源氏宮関係の記述において「あはれ」の語は非常に少なく、大系本によれば僅か三例にとどまつている事実も、同時に指摘しておきたい。基本的に「あはれ」は、人（もの）と人（もの）との交流の中に、多く共感としてたちあらわれることばであるから、『狭衣物語』において狭衣と源氏宮との交流なるものがいかに描かれることすくなかったかが、この数字からも示唆されるのである。

共にこの語を多く持つとは言っても、飛鳥井女君関係の記述における「あはれ」と女二宮関係の記述における「あはれ」とでは、様相を全く異にしている。

ここでは飛鳥井女君について詳述するいとまはないが、基本的に飛鳥井女君物語においては一貫して、狭衣が女君に寄せる「あはれ」に対して女君は狭衣の期待通りに応えている、と言うことができよう。女君自身、子までなした狭衣とのつながりを「あはれなりける契りのほど」（巻一・八七ウ）と認識しており、巻二以降彼女は現し身の姿では全く物語に登場しないものの、狭衣の「あはれ」を充足させる、あるいは更なる「あはれ」を引き出してやまない、よすがとなる情報（具体的には形見の品や遺詠など）をもたらし続ける。

実のところ、狭衣をめぐる女君たちの中で「死者」である飛鳥井女君が唯一、狭衣との間に十全なる「あはれ」な関係を取り結びえた女君なのであった。そして、「あはれ」の語もあくまでも二人の共感関係、共鳴しあう関係を肯定する文脈の中で働いており、その意味では素朴に用いられていると言えるのである。

一方、女二宮物語における「あはれ」は、飛鳥井女君物語におけるそれと較べると、屈折したかたちでの用いられたが目につくのである。それは、女二宮が頑ななまでに狭衣からの「あはれ」の働きかけを拒絶し、「あはれ」の感情に流されてしまうことを徹底して自らに戒めているからである。狭衣と女二宮との物語は「あはれ」をめぐる葛藤の物語という様相を呈している。そのことを、物語の中から幾つかの場面を拾い上げて確認していきたい。

D 入道の宮は嵯峨の院にのみおはしまして、この若宮の御事も知りきこえたまはねば、ただ三の宮ぞあはれに思ひきこえさせたまへるを、秋はほかへ渡りたまふべければ、(狭衣ハ若宮ノコトガ)いと心苦しく、
(巻二・一二一オ)

E よろづに取りどころなく悔しきことのみ尽きせぬままには、いまさらに日に二たび三たび、かきつめつつ恨みきこえたまふさま、海人のはやまにも、「見るべきものとおぼしたらず」と聞くは、「過ぎぬるかたの報いにや」と、つらく心憂し。「限りなき御身の程といひながらも、我が身は、などであはれもかけられたてまつるまじきぞ。浅からぬ契りのほども、おぼし知るまじうやは」と、心憂ければ、
(巻三・八オ)

F (中納言典侍二対シ狭衣)「かく、常にむかへたまふぞとよ。そこにだに、時々は『あはれ』とのたまへ」など、夜もすがら嘆き明かし、
(巻三・六九ウ)

G (女二宮二対シ中納言典侍ハ、狭衣ガ)若宮のうつくしさによろづを思ひなぐさめたまへるさまなど、あはれも浅からず聞こえ

させて、(略)と申せば、いとど御顔の色うつろひまさりて、寄り臥させたまひぬれば、「これなほなほ」ともえ申さず立ちぬ。
(巻三・七一オウウ)

H 「袖濡らす」といふ物語の承香殿の女御は、あはれなる心ばへを見つめたまひければにや、「根にさはる」とも言ひ出でたまひけん。これ(女二宮)は、世をおぼろけならずおぼし捨ててしかば、(略)「かかる目を見て、死ぬるわざもがな」とのみおぼさるれば、まことに消え入りぬべき御けはひのあるかなきかなど、ただ昔ながらにて、言ひ知らず心苦しううたげなるも、

I (狭衣の内省)「かの御心は『あはれ』とおぼし返すべきにはあらねど、いとかくあらまほしからぬ有様を見つつ、この御身(大系本「この心」)をいたづらになしつるは、また仏、『あはれ』とおぼしなん」
(巻三・一三九オ)

J (狭衣ハ女二宮宛ノ文二)
「年積もるしることなる今日よりはあはれを添へて憂き
は忘れぬ
さりともと見えはべる有様は、げに、御覧じ入れざらんもあまり人目若々しく」など書かせたまひて、(略)(女二宮ハ若宮ノ

今日の御様、いとこと人とさへ見えぬ顔つきの恥づかしさわりなくて、御覧すべきやうもなきに、まして今日しもあはれ添へさせたまふべきさまにもあらず。
(巻四・一〇八オウウ)

右に列挙した箇所においては、しばしば狭衣や二人の間の橋渡し

をする女房・中納言典侍が、狭衣と女二宮との間に生まれた秘密の子「若宮」の存在を通して女二宮に「あはれ」の感情を促そうとしていることがわかる。そして、若宮のことばに「女二宮ハ自分ヲ例も抱きたまはぬぞ」(巻三・一二九才)、女二宮の態度に「宮は(若宮ヲ)見だにおこせたまはず」(巻三・一三二ウ)、狭衣が若宮に向かい発したことばに「まろよりほかに、限りなく思ひきこゆる人のなきこそあはれなれ」(巻四・九九ウ)とあるように、この若宮の存在は『狭衣物語』の中で、狭衣と女二宮との間に心の接点がないことを象徴するものとなっている。たとえば引用Dの場合は、狭衣と女二宮との間の「あはれ」の葛藤を直接的に示す用例とは言えないが、妹女三宮だけが若宮を気にかけているということを殊更に述べることによって、女二宮の若宮に対する無関心、「あはれ」の欠如を強調する叙述になっていると読めるのであり、そのことを經由して最終的に狭衣の若宮に対する「いと心苦し」の感情——若宮への「あはれ」という思い——を呼び起こすことになる。ここは、右に述べた、狭衣と女二宮との心の乖離を象徴するという若宮の物語的役割の、始発点ともいうべき場面となっているのである。

この引用Dを含む場面の前には、源氏宮が突然賀茂斎院に卜定されることが決定し、慌ただしく移居するという出来事が長く語られているのであるが、その中に、『狭衣物語』において最も重要な箇所の一つというべき、狭衣の内省場面がある。そこで狭衣は、斎院に卜定された源氏宮を思い、出家した女二宮を思い、投身した(と彼は思っている)飛鳥井女君を思う。

K いづれもいづれも、限りだになき物思ひは、口惜しく、慰めどころだにぞなかりける。

我が恋の一筋ならず悲しきは逢ふを限りと思ひだにせず
「行末も知らず」とだにも、え言ふべくもなかりけるを。

(巻二・一〇四オウウ)

この独詠が、巻一・巻二物語前半部のクライマックスとみなされることは間違いないだろう。ここにおいてひとまず、狭衣と彼にかかわる女君たちとの現時点での関係が総括されているということであり、この総括のあとの巻二の残る部分は、言ってみれば巻三への準備的な内容となっている。その準備的な部分に引用Dの記述があり、そこでさりなく狭衣と女二宮との心のすれ違いが語られていることは、それが巻三以降の女二宮物語の重要な命題となることの予告であると考えられるのである。

というのも、巻二の段階では女二宮物語関係の「あはれ」の語は、専ら「狭衣が女二宮をあはれに思う」という叙述内容の中で用いられていた——二人の間に起きた事件を考えれば、それが最も自然なかたちであることは言うまでもない——のが、巻三以降になると、それだけではなく、引用E・Jのように「女二宮に自分をあはれと思つてほしい、と狭衣が願う」という叙述内容の中で用いられる場合も見られるようになる。また、それら引用E・Jでは、狭衣の願い通りにならない女二宮の反応も描かれている。すなわち巻三以降の女二宮物語では、「狭衣が女二宮をあはれに思う」叙述と「女二宮に自分をあはれと思つてほしい、と狭衣が願う」叙述、そして「狭

衣の期待に反し、女二宮はあはれという反応を示さない叙述とが、「あはれ」をめぐる混在しているわけである。このように飛鳥井女君物語とは異なり複雑な様相を呈する「あはれ」のありかたに、女二宮物語の内実そのものが凝縮されていると思われるのであるが、もう暫く引用箇所によって確認していきたい。

引用Fでは、狭衣が直接に女二宮に「あはれ」を求めているわけではないが、女二宮付きの女房で狭衣とも懇意の中納言典侍に「ここにだに、時々『あはれ』とのたまへ」と懇願することにより、女二宮自身が決して狭衣に「あはれ」と言ってはくれないこと、また狭衣がそれを辛く自覚していることを、強調している。ここも「あはれ」をめぐる狭衣の願望と女二宮の無反応とを叙述内容としてもっている。

続く引用Gは、狭衣の懇願を受けて、彼の代弁者として中納言典侍が女二宮の「あはれ」の感情をなんとか揺り動かそうとする場面であり、その手段として宮が生んだ若宮のことを話題に出すのであるが、彼女は動揺こそするものの、中納言典侍ひいては狭衣が期待したような、子の存在にほだされての「あはれ」という反応は、やはり見せようとなしない。「いとど御顔の色うつろひまさりて」とあるように、木石ならぬ女二宮は心を動かされないわけではないのだが、「寄り臥すことによつてその心の動きを自らの内に秘め隠してしまふ。感情を自己の内部にしまいこみ決して他人にそれを見せまいとする」とは、物語において最後まで貫かれる女二宮の行動様式である⁽¹⁾と言える。

引用Hでは、先行物語『袖濡らす』⁽¹²⁾に描かれた、やはり男君から

いまさらどうにもならぬはずの恋心を訴えられたときの承香殿女御なる女君の反応を引き合いに出して、女二宮の心強さが強調されている。『袖濡らす』では男君に迫られた女御は、「いはじとて忌むにはあらず浮き沈み生ひたる草のねにさはる身を」(定家撰『後百首歌合』六四番右歌の詞書に拠る)とことばをかけたらしい。拒絶するにしても自分に心を寄せる男君に対してなんらかの反応を示す、そのような柔軟な物腰は、『狭衣物語』作者の認識していた「物語の女君」の普通のありかたであつたようだ。中納言典侍が狭衣に語つた中に、「げに、あさましきことと強ひてはぶききこえん御仲の契りとは見たてまつらねど、昔物語の姫君などのやうに、中の人の言ふにしたがひてしおしぶにいざり出でさせたまふべきにもあらず」(巻三・六八ウ)というものがあるが、この典侍の発言はまさに、一般の「物語の女君」とは異なる女二宮像を、端的に示したものであることになろう。

その女二宮の心強さを狭衣自身強い実感として認める引用Iにおいては、女二宮から得られぬ「あはれ」を求めて仏にすがろうとする狭衣と、仏にすがることでは「あはれ」を振り捨てる自らの生き方を確かなものにしようとする女二宮との、全く逆の方向性の対比が実に鮮やかなのである。

引用Jは、若宮が元服を迎えた日、そのめでたさと感慨とに免じて心を開いてほしいと願つた狭衣の期待も虚しく、女二宮はやはり翻意することがなかった、という場面であるが、ここでも女二宮は動揺しつつも他人にそれを見せないという自らの行動様式に忠実である。血を分けた若宮の存在も遂に女二宮の「あはれ」を引き出す

ことができない。

このように、卷三以降の女二宮は「あはれ」に意識的に背を向ける女君として明確に造型されており、「あはれ」を彼女に求め続ける狭衣とは決して接点を持つことはない。狭衣にとっては女二宮との「けちかきほどのあはれ」の証そのものである若宮の存在を効果的に用いながら、「あはれ」をめぐる狭衣と女二宮とのいかんともしがたしい乖離のさまを、物語は持続的に描き出していくのである。

(三)

ところで前節で掲げた引用Eの文脈を追っていくと、狭衣の中で、女二宮との埋めがたい距離を「過ぎぬるかたの報いにや」と自ら招いた仕儀として省みる思いと、「我が身は、などてあはれもかけられたまつるまじきぞ」と女二宮の冷淡さを恨む思いとが、同居していることがわかる。この一見矛盾しているようにみえる二つの思いが「つらく心憂し」とまとめられていくわけだが、この「つらし」も、女二宮物語の内実を端的に示す形容語の一つとして認められるように思われる。

今こころみに小学館古語大辞典を繙いてみると、「つらし」の語については「①薄情だ。冷淡だ。思いやがない。②無情・無神経な振る舞いが苦しく思われるさま。心苦しい。恨めしい。しゃくにさわる。」と語義が説明されており、加えて、語誌の項(藤本二朗氏による)では「自分、または、相手からの能動的意志的な働きかけによつて生ずる非友好的対人関係のありようを形容する語」という解

説が付されている。思うに「つらし」は、「あはれ」が相手への共感関係・親近性の発露であるとすれば、それとは対照的に、相手との共感関係を認められないところに存在する非親近的な形容語であるといえよう。このことを念頭に入れつつ「狭衣物語」の「つらし」を調査してみると、大系本によれば物語内に「つらし」は全六十例を数えるのであるが、そのうち狭衣と女二宮との関係にかかわる「つらし」は実に二十七例にも及んでおり、無視するわけにはいかないのである。これらの「つらし」は語義的には「恨めしい」という現代語に近い例が多いのであるが、その使われかたを細かく見ていくと、

①女二宮が狭衣を「つらく」思う——八例

②女二宮が狭衣を「つらく」思っているだろうと、狭衣が自覚・

想像する——九例

③狭衣が女二宮を「つらく」思う——十例

という結果となる。単純に数値から見ただけでも、狭衣と女二宮との間に交わされる重要な感情語として「つらし」があることについては疑問の余地はあるまい。そして注目すべきは、二人の間に起きた事件の一部始終からすれば当然「つらし」は女二宮から狭衣に向けられる感情語としての側面を強調されてしかるべきと思われるのに、実際には逆に狭衣から女二宮に向けられる感情語としての「つらし」もかなりの数にのぼっている(①③の十例)ということである。そして後者の「つらし」は、やはり卷三以降の物語において見られるようになるものである。二人の密事が発生する卷二以降の物語から幾つかの「つらし」を示して、その様相を確認しておきたい。

L〔狭衣の内省〕「人知れず思ふこと違ひなばと世の気色見はべる
ほどは、忍び忍びにも見たてまつらんとあまり心のどかに思ふ
ほど、げに人はいかでかはおろかにつらきものとおぼさざらん」

(巻二・六二ウ〜六三オ)

M〔狭衣ハ〕口惜しう心憂く思へば、身よりほかにつらき人なく、
悔しういみじきに、(略) 悲しなどは世の常なり。

(巻二・六六ウ)

N いづれをも、この女宮(Ⅱ女二宮ノ姉妹)たちをば妹背のやう
に預かりきこえさせたまふにも、入道の宮の厭ひ捨てさせたま
ひてしつらさも、飽かず口惜しうおぼしけり。(巻三・七オ)

O「ただ、今しばし(女二宮ガ)変はらぬさまにておはせましかは、
かかること(Ⅱ一品宮トノ縁談)を、人おぼし寄らましや」な
どおぼすに、我があやまちともおぼされず、つらさの数多くま
さりて、(巻三・六六オ)

P はかばかしき御気色もなかりけると見ゆる気色も、常のことな
れど、「おほかたにつけても、今はいとかうしも直屋籠りに情け
なくやはもてなしたまふべき」と人わろく、つらう、「今はかは
かりの御事をだに、同じ心に我もつれなく忘れなん」とおぼせ
ど、ただ今もさし向かひたまへる(若宮ノ)御有様の、なのめ
ならぬあはれのゆかりには、何か恋しうおぼし出できこえたま
はざらん。

(巻四・一〇九ウ〜一一〇オ)

Q〔女二宮に接近した狭衣の哀訴〕「あさましようおぼつかなき御も
てなしも、思へばすべてことわりに、身よりほかにつらき人も
なければ、なほいかで疾くあらぬ所もがなと願ひはべるも、い

でや、さてもかう憂きものにおぼし出でられながらは、いづく
にもありがたうや。(略)」(巻四・一二四ウ)

巻二以降の各巻から二例ずつあげたうち、巻二の二例、引用L・
Mはともに女二宮が出家した後の狭衣の悔恨の述懐である。ここで
は宮の出家についての責任を自分自身にあるものとする、すなわち
加害者として自覚する狭衣がいる。その自覚をあらわす引用Mの「身
よりほかにつらき人」がないという言いかたは、引用Qでも繰り返
されている。引用Qは物語最後のヤマ場ともいふべき場面からのも
ので、ここは直接女二宮に向かっての発言の中であるぶんいくらか
割り引いて考えたほうがよいかもしれないが、一応、女二宮に対す
る自らのかつての仕打ちを悔やむ狭衣の感情は、それはそれとして
物語に貫かれているようだ。

しかし一方で巻三以降の物語では、引用N・O・Pのような「つ
らしも狭衣の物思いの一つの典型をかたちづくっているのである。
特に、巻三開巻早々に出てくる引用Nの「つらし」は、先に分類し
た③型の「つらし」の物語初登場の用例にあたるもので、引用L・
Mと比較してみた場合、女二宮の出家の意味が狭衣の中で変化して
いる様相を端的に示すものとして、重要であるといえよう。すなわ
ち、ここでは狭衣は女二宮の出家を「宮が自分を捨てた」行為とみ
なし、加害者としての女二宮に対する被害者としての自分、という
構図に二人の関係を捉えあらためていのである。引用O中の「わ
があやまちともおぼされず」という地の文の表現がいみじくも示す
ように、このような狭衣の思考は「わがあやまち」に目をつぶった

一種のすりかえとも言えるのであるが、しかし単純にすりかえとは言い切れない、狭衣の内面の屈折と葛藤が、巻三以降の女二宮物語では繰り返されている。つまり、女二宮に対する加害者意識が消えようもなく存在し続ける一方で、宮の頑なな態度によって自分を被害者だと感じる意識も強まってくつのである。そのあやにくさを③型の「つらし」は端的に示してくれている。そしてこの型の「つらし」の存在によって、女二宮物語は「狭衣物語」において独自の役割を果たしているのである。

というのは、①型②型の「女二宮が狭衣をつらく思う」「それを狭衣が自覚・想像する」という叙述内容で用いられる「つらし」は、「狭衣は源氏宮を最も愛するがゆえに女二宮との関係の露見を憚り不誠実な態度をとった」ということを前提とするものだからである（引用Jの「人知れず思ふこと違ひなば、と世の気色見はべるほどは、忍び忍びにも見たてまつらんと、あまり心のどかに思ふほど」という叙述が典型的な例である）。つまり、「つらし」が「女二宮にとつて狭衣がつらし」という文脈で語られる限り、女二宮物語は、源氏宮を一途に愛するがゆえに狭衣が他の女君を不幸にする物語である、という定義を免れないのである。その場合、女二宮の存在はあくまでも源氏宮の存在の下位に位置付けられることになる。

しかし、「狭衣にとつて女二宮がつらし」という文脈で語られる「つらし」があらわれることによって、狭衣と女二宮とのかわりを描く物語は、源氏宮の存在とは別の次元で語られるべき生命を持つことになるといえよう。ここにおいてはじめて女二宮物語は「狭衣物語」の柱の一本として独り立ちすることになる。男と女が互いに相

手を「つらき」人と思うという皮肉に運命的な関係は、複数の女君と狭衣とのかわりを描く「狭衣物語」の中でも女二宮物語に固有のものでからである。

ここで、前節で述べた「あはれ」の問題と「つらし」の問題とに脈絡をつけて本節を締め括りたい。たとえば引用Eで狭衣を「あはれもかけられたてまつるまじき」と嘆かせたような、女二宮の頑なな「あはれ」拒否の態度が、狭衣の「つらし」という思いを引き起こしたのだった。「あはれ」が閉ざされたところに「つらし」の関係が立ち現れるという点では、引用Pが注目すべき場面である。ここは前節で掲げた引用Jに直接続く場面であるが、女二宮の心を動かす「あはれ」を引き出そうとした試みが不成功に終わり、やはり心を閉ざしたままの宮（＝引用J）に対して、引用Pの狭衣は「つらし」と強く感じ、自分のみじめさを慰めようとするかのように「同じ心に我もつれなく」宮のことを忘れたいとまずは願う。二人の間の共感関係の不成立を認めてしまおうとするのである。しかしそのあとの彼は結局、若宮という「あはれ」のほだしから逃れられず、女二宮思慕という「あはれ」に立ち戻って行かざるをえない。女二宮との共感関係の成立をどうしても諦め切れないということであり、その執着から狭衣はついに逃れることができないのである。

相手の感情に共感をおぼえたときに湧き起こる「あはれ」に対して、本節ははじめに引いた藤本氏の解説によれば「つらし」は「非友好的・対人関係のありようを形容する語」だとされる。狭衣に対し共感を抱くことを徹底的に自戒する女二宮の「非友好的」なありかたは、物語の最後まで貫かれている。狭衣の求める「あはれ」に女二

宮が応えることなく、「あはれ」の関係が相互のものとして成り立たぬまま平行線をたどる物語、それゆえに女二宮物語には「つらし」が頻出しているといえよう。

(四)

ここまで「あはれ」「つらし」という二つの形容語に注目して女二宮物語をたどってきた結果、女二宮に「あはれ」を拒否され、「つらし」とまで感じながらも、やはり「あはれ」を求めて彼女に執着し続ける狭衣のありかたを確かめることができた。そして、そのあくなき執着を支える狭衣の心理的根拠として、本稿はじめに触れた引用Aの波線部「けちかきほどのあはれ」があつたと思われるのである。

『狭衣物語』における「けちかし」は名詞「けちかさ」も含めて大系本で十四例を数えるが、いずれも高貴な人物を相手とした場合の、その人との距離の近さをいう場合に用いられている。高貴な相手ゆえに「近し」とまで顕わな状態ではないが、というニュアンスを持つためであろう。したがって、狭衣を起点とする場合の「けちかし」であれば、対源氏宮Ⅱ二例、対女二宮Ⅱ六例、対女一宮Ⅱ一例、対式部卿宮姫君Ⅱ一例、という数字が残り、身分的に低い飛鳥井女君については「けちかし」とは表現されていない。

ところで、他の女君に対しては狭衣との物理的な距離の近さを示すべく用いられている「けちかし」が、女二宮に関する場合には、やや特殊な用いられたをされている。

R(狭衣の内省)「今はいかやうにかおほしなりぬるとも、いかさまにしてか、いま一度けちかきほどの御けはひを聞くわざもがな」(巻三・七ウ)

S(女二宮の内省)「夢にてだにかばかりのけちかきは、または聞かじ」(巻三・一三四オ)

この二例の「けちかし」は、物理的な距離の近さを示すのみならず、二人の問題の夜の逢瀬そのものを指す、一種の醜化表現としての意味をも合わせ持っている」と読める。そして例の「けちかきほどのあはれ」も、やはり醜化表現とみなしてよいものであつた。

引用A・R・Sによって狭衣と女二宮とがともに逢瀬の記憶を「けちかし」という形容語で捉えていることがわかるが、それだけに、そこから嫌悪・拒絶に向かう女二宮のありかたと、「いま一度のけちかさ」を願う「あはれ」へ向かう狭衣のありかたとの対比が際立っているともいえよう。ただ一度の逢瀬は女二宮にとっては悪夢以外の何物でもなかったが、狭衣にとっては宮への慕わしさを喚起し続ける貴重な記憶となつていることは確かである。しかしながら一方で、狭衣が抱いている女二宮の記憶には、どこかはかない、曖昧なところがあるようにも思われるのである。

女二宮は『狭衣物語』に登場する女君たちの中で最も多く草花に喩えられており、それは常に狭衣の視線を介しての喩えなのであるが、このことも「はかなさ」「曖昧さ」と無関係ではあるまい。

巻二で逢瀬をもったあとの狭衣の内省場面において女二宮は「逢坂のさねかづら」(巻二・三〇ウ)と呼ばれているのだが、言うまで

もなくこれは

名にしおはば相坂山のさねかづら人にしられてくるよしもがな
(後撰集・恋三・七〇〇・藤原定方。新編国歌大観に拠る)

を引き、「さねかづら」に「さ寝」が掛けられ逢瀬のイメージを伴う。
また、物語最終場面で狭衣が「立ち返り折らで過ぎ憂き女郎花」(巻四・一二五ウ)と詠むように「女郎花」も女二宮を象徴する花であるが、この花もまた女性の媚態をイメージするものであることは、幾つかの著名な和歌が証してくれる。第一節で触れた「大和撫子」を含め、このようにしばしば草花に喩えられる女二宮の印象は、狭衣の中で逢瀬の夜から一貫している。

T なよなよとあてに心苦しきものから、ただ御衣にまつはれておぼししをれたるさま、なのめならずらうたげなり。¹⁵⁾

(巻二・一五ウ)

「なよなよ」「おぼししをれたる」という表現に、狭衣が刻んだ女二宮のイメージの端緒があると思われるが、その可憐にして脆弱な姿が狭衣の脳裏で再現されるとき、草花の喩えがあらわれてくる。

草花のイメージは結局「手折られるもの」のイメージへとつながり、それゆえ逢瀬を持った関係にある女二宮を支配するのであるが、いったいに、狭衣にとって女二宮との結びつきは、一度は肉体を介在させた間柄である割に、どこか草花を抱いたようにはかなく曖昧

なものであったようなところがある。実体を伴わない記憶という感じが強いのである。

それは、逢瀬の醜化表現としての意を含む「けぢかし」が、あくまでも「気(け)―近し」ということばであることもかわるよう思うれる。関連して言えば、狭衣が女二宮を思い起こす場合に「けはひ」が甦る、という表現が散見されることも指摘することができる。

U 今宵はあはれなりつる御けはひなどの、面影に心苦しう恋しきは、ひとかたにしもあらず。¹⁶⁾
(巻三・一三八ウ)

V あやしうなべてならずものあはれげに、心苦しき御けはひを、
(巻四・一二四オ)

ここには二例掲げたが、既に引いた中では引用B・H・Rにおいて女二宮が「けはひ」として狭衣に捉えられている。それぞれ状況は異なるが、これらの引用箇所によって、狭衣にとって女二宮が「けはひ」の人であるという点は押さえられるであろう。大系本によれば、狭衣が女二宮を「けはひ」と捉えるのは物語内で十三例にも及ぶ。「けはひ」として刻まれる女二宮の記憶、印象は、既述したようにやはり、はかなさ、曖昧さを伴っていると言つてよいのではなからうか。

実体を伴わないかのような、はかなく曖昧な記憶を抛りどころとして継続する狭衣の女二宮恋慕は、それゆえに次第に観念化の度合いを強めていく。何の前触れもなく偶発的な密事から出発した狭衣

と女二宮との関係は、以後まったく肉体が介在しないのであるから、狭衣の中で観念のみが増幅してゆくこともゆえなしとしない。相手が出家した女君であるという限定の中で、狭衣は二人の仲を確かめる唯一の手段として「あはれ」の共感関係を取り結ぼうとするのである。肉体関係だけが先行してしまった二人の間に精神的な結びつきを遅ればせながら加えることにより、恋愛関係を全うさせようとするのが狭衣であり、一方、精神的な結びつきを拒否することで、かつての逢瀬までも記憶の彼方に葬り去ろうとするのが女二宮なのである。

しかし幾度とない無視や拒絶にもかかわらず、女二宮は狭衣の中に刻まれたそのイメージゆえに、彼の関心を断ち切ることができない。本稿で引いてきた箇所には「心苦し」「らうたげ」という形容語も頻繁にみえているが、これは引用上の逢瀬の夜から狭衣の女二宮に対する感じかたとして一貫している。一度きりの逢瀬のあとの二人の関係が肉性を欠いているぶん、第一印象は狭衣の観念の中で繰り返されて強くなる一方である。そもそも「心苦し」「らうたげ」は主観的な意味合いが強い、「あはれ」に近接した形容語である。女二宮が狭衣を遠ざけようとするほど、狭衣の恋慕の観念性は強まり、ために二人の距離は広がりも縮まりもせず、平行線をたどるばかりなのである。

(五)

「あはれ」に背を向け続ける女君の姿を描く物語、と女二宮物語を

定義するとき、そして、『狭衣物語』最終場面がまさにそれを象徴するかのように、口を閉ざすことによつて男の願望を拒絶する女の姿をもつて結ばれていたことを考え合わせるとき、連想の糸に手繰り寄せられてくるのは、『源氏物語』宇治十帖の浮舟の物語ではないだろうか。そして宇治十帖の幕切れにおいては、あらぬ邪推をする薫が、いささか揶揄あるいは皮肉を含んだ描かれかたをされていた。しかし『狭衣物語』では、女二宮に「あはれ」を拒否される狭衣が揶揄の対象、皮肉の対象になっているとは考えられない。『狭衣物語』の幕切れは、「あはれ」に背を向け心を開かぬ女二宮の態度に遭つた狭衣の嘆きを、秋の、文字通り「あはれ」深い情景の中に、美しく同化させる場面で閉じられている。

嵯峨野の花、盛りめでたく夕露重たげに紐解きわたしたる色々、いづれとなく見置きがたき中に、女郎花の人見ることや苦しかりらん、霧の絶え間もわりなげなるけしきにて立ち隠れたるは、なほ行き過ぎがたうおほしめされて、

立ち返り折らで過ぎ憂き女郎花なほやすらはん霧の籬にながめ入らせたまへる御かたちの夕映え、「なほ、いとかかる例はあらじ」と見えさせたまへるに、世とともにものをのみおほして過ぎぬるこそ、「いかなりける前の世の契りにか」と見えたまひける。

(巻四・一二五ウ)

「あはれ」拒否の態度を貫いた女二宮の心強さは、ここでもやはり「人見ること」を苦しがるはかなげな風情の「女郎花」に喩えられ、

狭衣を主役とする「あはれ」なる物語場面の中に吸収されてしまい、文字通り「霧」消してしまっているのである。語り手はさらに狭衣の嘆きを美化し、その嘆きの因を敢えて問うこともない。「ものをのみおぼ」す狭衣の生を「前の世の契り」と説明し一種の目晦ましをおこないつつ、美しき彼の姿を夕映えに浮かび上がらせるばかりである。

結局のところ、「あはれ」をめぐる男と女の乖離・葛藤を語ってきた物語の意図は、主人公狭衣の嘆きを描くことにあった。女二宮のありかたを通して読者が感ずるところがどうであろうと、描かれているのはあくまでも「女二宮という女君とかかわる狭衣の物語」である。当たり前のことを言うようだが、『狭衣物語』は『狭衣の物語』なのであり、女二宮物語は重要なファクターの一つとして『狭衣物語』に奉仕しているのである。巻三以降語られてきた狭衣と女二宮とのあやにくな関係も、過去を引きずり嘆き続ける狭衣像に結実されるべく、あつたのだ。

本稿では、「あはれ」「つらし」を中心に女二宮物語に特徴的な幾つかのことを分析することによって、おもに狭衣との心理的な葛藤という面から女二宮の物語上の役割について述べてきた。言うまでもなく女二宮は「狭衣を皇位へ押し上げる¹⁸⁾」という物語展開上欠くべからざる役割を果たしており、その点を絡めてこそ女二宮（女二宮物語）を全的に論じたことになるのだが、それについては別の機会に譲ることにしたい。

注

- (1) 「狭衣物語の表現機構——女二宮の物語をめぐる——」（『国文学研究』一九九一・三。以下、先行研究の発表年は西暦の下二桁のみを記す）。
 - (2) 「女二宮の位相——『狭衣物語』の人物と方法——」（『論集源氏物語とその前後3』九二・五。『狭衣物語の人物と方法』九二所収。）
 - (3) 「狭衣物語」本文は、吉田幸一氏刊『古典聚英狭衣物語』の深川本（巻四は伝二条為定筆本）複製に拠り、適宜仮名遣いをあらため私に漢字をあて句読点や鍵括弧を施し、必要に応じて校訂したものを使用する。また『狭衣物語』からの引用本文には順次アルファベットを引用記号として付した。
 - (4) 参考までに流布本系本文を新潮日本古典集成本の下巻九八頁により掲げておく。

さばかり飽かぬところなく、らうたげにうつくしかりし御有様をだに、「なほ室の八島には立ち並びたまはざらむ」と、せちにおとしめ思ひやりきこえたまひし御目のならひに、ことわりぞかし。
 - (5) この本文だと「ことわりぞかし」について「新妻一品の宮が極端に劣つてうつるのも当然である」（集成本の訳による。全書本もほぼ同訳）という解釈も成り立つ。
 - (6) 「狭衣物語の方法——歌句の引用と女君の呼称——」（『平安時代の和歌と物語』八三・三）。
- 底本「かきね」だが、校本によれば独自異文とみられるので諸

本により校訂する。

- (7) 集成本上巻一六頁「すこしゆるぎきたる山賤の垣ほの撫子は」、同九七頁「常よりも、今も見てしがとなむ」。

- (8) 以下、大系本による語彙調査はすべて、塚原鉄雄・秋本守英・神尾暢子氏共編『狭衣物語語彙索引』（七五・二二、笠間書院）に拠った。

- (9) 『古語の宇宙誌』（『国文学』臨時増刊、九一・五）で佐藤武義氏は「あはれ」について「外界から受けた刺激に対する反応として、総合的に表出する語」と説明している。

- (10) 大系本「行方」。諸本拮抗しているため校訂はしなかったが、下敷きとなった躬恒の「わがこひはゆくへもしらずはてもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」（古今集など）に拠れば「行方」のほうが妥当か。

- (11) たとえば狭衣からの贈歌に対する応えとして詠まれた女二宮の和歌が尽く独詠にとどまっていることは、この女二宮の行動様式を端的に示す現象であろう。

- (12) 散逸物語であるが、『物語二百番歌合（後百番歌合）』『風葉和歌集』に多数の和歌が採られ、正確な物語名は『左も右も袖ぬらす』かとされている。

- (13) 引用は樋口芳麻呂氏校注『王朝物語秀歌選（上）』（岩波文庫）に拠る。

- (14) 女二宮と「女郎花」との関わりについては、注1鈴木論文に詳しい。

- (15) 諸本間で異同はげしく流布本系本文はかなり異なるが、大系本

が「たゞ御衣にまとはれて思ししをれたるさま」であるように、非流布本系本文はほぼ「しをる」という表現を用いている。

- (16) ほかに、狭衣が女一宮（女二宮の姉）を「けはひ」と捉える例も三箇所にみられる。彼女が女二宮のゆかりであるがゆえに狭衣の関心の対象となることを考えれば、ここの数値に加えてもよいかもしれない。

- (17) 浮舟自身が「あはれ」を拒否したという論点ではないが、宇治十帖が最終的に反「あはれ」の世界になっていることを指摘したものとして、原岡文子氏「あはれの世界の相対化と浮舟の物語」（『国語と国文学』七五・三）『源氏物語阿義の糸』九〇所収）がある。

- (18) 注2久下論文に「狭衣を皇位へ押し上げること」と「そのために犠牲になった女君の姿、悲しみ」とが女二宮の存在の二面性であるとの指摘がある。本稿もこの「二面性」の存在を前提とするものであるが、第二点に関して久下氏と考えを異にしていることについては、述べてきたとおりである。

（はぎの あつこ・北大大学院博士課程）